

巻頭によせて

校長 北 村 聡

Kitamura Satoshi



中国南宋時代の儒学者、朱熹と呂祖謙がともに著した『近思録』(註)に、「大凡(おおよそ) 儒者ハ未ダ敢(あえ) テ深ク道ニ造(いた) ルヲ望マズ。且(しばら) ク只存スル所正シク、善悪ヲ分別シ、廉恥(れんち) ヲ識ルヲ得シノミ。此等ノ如キ人ノ多クンバ、亦須(またすべから) ク漸(よ) うや) ク好(よ) カルベシ。」(凡そ儒者に対しては、深く道に到達することを無理に望みはしない。さしあたり考え方が正しく、善悪を区別し、恥を心得るべきである。こういった人が多ければ、世間は次第によくなってゆくだろう)という言葉があります。救われるような言葉であると同時に、改めて、修養につとめ、正しく生きる心がけを常に失わないようにしなければとの緊張感を伴う言葉です。

人は皆が聖人君子になれるわけもなく、イエスキリストや釈迦、ムハンマドのようにになれるものでもありません。仏教の言葉で言う「煩惱」から完全に解放されることはできないのです。

聖人君子にほど遠い自分を必要以上に責めることもありませんが、常に少しでも聖人君子に近づこうとする気持ちを持ち続けなければなりません。成人して、自分自身の狭い視野の中に安住し、もう自分は完全に人から学ぶものは何もないと考えたときに墮落の始まりです。

コロナ禍の中、人間社会全体から心の余裕が失われ、ともすれば人の批判ばかりして、何でも「他人のせい」にしがちな今日この頃ですが、『近思録』の一文に触れ、そんな時間があつたら機会あるごとに優れた先人が著したもの、また、その人について著されたものに触れることに費やそうと、今更のように反省の思いでいるところです。

(註) 新釈漢文体系『近思録』 市川安司 著 昭和50年 明治書院